

ヨエル書2章12-14節 「悔い改めへの呼びかけ」

1A 主への立ち返り 12

1B 心を尽くした悔い改め

2B 断食と、涙と、嘆きをもった悔い改め

2A 神の慈愛 13

1B 恵みと憐れみに満ちた方

2B よく忍耐し、親切な方

3B 災いを思い直される方

3A 神の回復 14

本文

ヨエル書 2 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びはヨエル書に入りました。ヨエル書は三章しかないので、午後に全て学びます。今朝注目したい箇所は、2 章 12-14 節です。「12 「しかし、今、…主の御告げ。…心を尽くし、断食と、涙と、嘆きとをもって、わたしに立ち返れ。」13 あなたがたの着物ではなく、あなたがたの心を引き裂け。あなたがたの神、主に立ち返れ。主は情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵み豊かで、わざわざを思い直してくださるからだ。14 主が思い直して、あわれみ、そのあとに祝福を残し、また、あなたがたの神、主への穀物のささげ物と注ぎのぶどう酒とを残してくださらないとだれが知ろう。」

私たちの国、日本は、自然災害の多く国です。外国と比べても、災害を受ける割合が多い国であります。地震や洪水、火山噴火が多いですが、ヨエルの預言しているイスラエルにおいて、自然災害の一つは、イナゴでした。イナゴについて、1 章 4 節で、「かみつくいなごが残した物は、いなごが食い、いなごが残した物は、ばったが食い、ばったが残した物は、食い荒らすいなごが食った。」とあるのですが、ここの「いなご」や「ばった」は、全て別のヘブル語が使われています。私たちが、お米について、いろいろな言い方、稲であったり、ご飯と言いますが、英語ならばライスです。それと同じように、イスラエルではイナゴは、あまりにも身近な存在で、その成長段階や種類によって幾通りもの呼び方があります。つまり、イナゴが襲来して穀物を食い荒らすと、その後、また別のイナゴの一群が来て残りのものを食い、四回にも渡ってその災いが襲ってきて、文字通り根こそぎ食い尽くされます。エジプトに対する災いでも、雹による災いがあった、それからイナゴの災いがありました。これは、恐怖に満ちた災いですが、ヨエルは間もなく彼らにイナゴの災いが襲って来ると予告していました。

それだけでは、ありません。イスラエルには人災もありました。イナゴの襲来のように、北から恐ろしい軍隊が押し寄せてきます。私たちが人災を受けるということは、なかなかありませんね。戦

後七十年以上、外敵に攻められていないからです。けれども、戦時中は原爆投下であるとか、また最近、原発事故が起きました。そのような未曾有の災難の時に、主は、イスラエルの人々に、「泣いて、嘆いて、断食して、心を裂いて主に立ち返りなさい。」と呼びかけておられます。これを他の言葉で言うなら、「悔い改め」です。

私たちが、しばしば犯してしまう過ちは、「なぜこのようなことが起こったのだろう。原因は何だったのか？」という原因探しをすることです。何か大きな事件が自分の身に降りかかった時に、それを行なってしまいます。それから、「原因が見つかったらそれを正して、直していこう」とします。しかし、原因探しをして、直していこうとする、そういった冷静な分析をしている中で、なおのこと残っているのは、「自分の知恵と力」です。それで、自分が悔い改めたつもりが、また同じ過ちを全く同じ形で犯すのです。すると、どんどん自己嫌悪に陥っていきます。悔い改めというのは、そういったものではありません。今みたいな、自己反省は悔い改めではありません。悔い改めというのは、自分を反省して行ないを改めるというよりも、自分はもうだめだ、ただ神の憐れみにすがるしかない！として、叫ぶことです。そして、主がご自分の御霊を注いでくださって、私たちの心を変えてくださることです。

1A 主への立ち返り 12

まず、12 節の「**わたしに立ち返れ。**」という言葉に注目したいと思います。ヘブル語では、シューブとうものです。ホセア書にも出て来た言葉ですね、聖書の他の箇所でも「悔い改めなさい」という言葉がありますが、それと同じ意味です。けれども、そこには日本語で僅かに誤った使い方があります。「罪を悔い改める」と言いますと、何らかの形で「反省する」という意味合いになります。けれども、悔い改めというのは、「立ち返れ」という言葉にあるように、「方向性」を表しています。罪から悔い改め、主のところに帰るという意味です。放蕩息子が遠い国で、惨めな状況になって、そこから悔い改め、父のところに帰ったのと同じです。ある状況や行為から離れて、主のもとに立ち返るのが悔い改める、であります。ですから、自分を見つめ、内省することは、ともすると方向は依然として自分自身ということになります。いいえ、自分から離れて、主に立ち返ることです。

1B 心を尽くした悔い改め

ここに、「**心を尽くし**」て主に立ち返りなさい、とあります。英語だと、「全ての心で」ということになります。「心半ばではなく」という意味です。私たちはホセア書の学びで、「二心」の問題について取り組みました。北イスラエルの民は、主なる神はあがめています。けれども、自分の生活があるのでそれは自分で解決して、動こうとします。けれども、そこにバアルという偶像礼拝があることを学びました。バアルとは、力の神、支配する神です。「自分のことは自分でやっていきたい」という、強い独立心です。クリスチャンになるまでは、まさにこれだけで生きていました。けれども、まだその自分で生きて行こうという意思が残っていると、二心になっています。これは、神をも締め出す自分の世界です。けれども、体裁として主を礼拝しておかないといけないかな、ということで、お祈り

はします。しかし根本的なところでは、自分の生活は自分が主体となっていて、後で、神やイエス様にすがっているという態勢です。神やイエス様という名は使っているかもしれませんが、困った時の神頼みになっていて、その困ったことが解決されたら、また自分の生活に戻るといふことの繰り返しです。神とキリストが初めになっていないで、終わりになっています。

しかし、主は正直ではない心を最も忌み嫌います。ラオデキヤの教会がそうでしたね、熱いか冷たいかのどちらかであってほしい、生ぬるいので吐き出すと主は言われました。そして、ヤコブが言いました。「4:8 神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。手を洗いよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。」口では神に近づいても、心がしっかり、自分で計算し、自分で建て直し、自分でやりくりしていれば、離れて行ってしまいます。真実な意味で神に近づいていません。ですが、涙や嘆きも含めて心を主に注ぎだせば、主は確実に私たちに近づいてくださいます。

2B 断食と、涙と、嘆きをもった悔い改め

そして「断食と、涙と、嘆きをもつて」立ち返りなさい、とあります。断食とは何か、もちろん食を立つことですが、その模範をダニエルは示していました。「9:3 そこで私は、顔を神である主に向けて祈り、断食をし、荒布を着、灰をかぶって、願い求めた。」エレミヤの預言で、ユダヤ人のバビロン捕囚が七十年であることを知ったのですが、それで彼は、しっかりと主に願う求めるための時間を取りました。何となく、悪い思いになったから「ごめんなさい」と気持ちを語ったのではなく、しっかりと顔を主に向けて、時間を取って、場所を確保して、主に対して祈ったのです。私たちが、とても大事な会合があれば、しっかりと準備して、心も整えて行きますね。そうやって時間を聖別すること、これが断食の本質です。自分の肉体を養うために多くの準備をしていますが、それを一時、やめることによって、自分の霊を養うために身も心も整えます。

そして、「涙と、嘆き」であります。先ほど、二心を改めなさいとヤコブが言った後で、こう言っています。「ヤコブ 4:9-10 あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高くしてくださいます。」私たちは、神の憐れみによって日々を生きている存在です。今、自分が減んでいないのは、主の憐れみによるとエレミヤは哀歌で言っていました。それだけ、私たちの命ははかない存在であり、弱い存在です。私たちの心がそんな強いはずがありません。主の前では、少なくともそうです。ですから、そうした心をそのまま注ぎだすこと自体が、私たちにとって神からの癒しとなります。こうやったらいいんだよ、ああやったらいいんだよ、という方法を教えようとなります。それに対する回答を与えようとなります。けれども、本当にそれが神の回答なのでしょう？人間の考えられる回答を与えて、それで慰めになるのでしょうか？

ヨブの嘆きと涙に対して、友人はそれを行なおうとしました。彼らは本当にヨブを励ましたかった。

しかし、それは解決にならず、神の義についての泥仕合が始まったのです。そして解決は何だったのか？それは、圧倒的な主権を持ち、知恵に満ちている創造主が、ヨブに現れたことです。嵐の中でこの方が現れたことです。ついに最後まで、ヨブに神がなぜ苦しみを与えたのかを教えておられません。私たちが知っている舞台裏、サタンがヨブの信仰を試すのに、神はヨブを信頼しておられて、やってみなさいとお許しになられたことです。最後のレビヤタンで僅かに、それとなく悪魔の存在を暗示していますが、けれどもはっきりと教えておられません。教えられないままで、ヨブは灰の中でひれ伏して、それで主を見上げて、悔い改めました。そして主は彼を憐れまれます。失った息子、娘の二倍の息子と娘を与えられます。このように、主は、回答の見いだせない涙と嘆きを用いて、私たちに憐れみを注ごうとされるのです。

2A 神の慈愛 13

そして、「**あなたがたの着物ではなく、あなたがたの心を引き裂け。あなたがたの神、主に立ち返れ。**」とされていますね。ユダヤ人は着物を引き裂いて、悲しみや嘆き、衝撃を表現していました。けれども、そうした行為さえが外側のもになってしまい、心まで引き裂いていなかったのです。私たちが、言葉で、作法で祈ることはあっても、心を引き裂いていなければ同じことをやってしまっているわけです。

1B 恵みと憐れみに満ちた方

私たちがなぜ、主に立ち返るのか？理由は、「**主は情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵み豊かで、わざわいを思い直してくださるからだ。**」であります。ここは、他の訳も見たいですね、新共同訳では、「**主は恵みに満ち、憐れみ深く／忍耐強く、慈しみに富み／くだした災いを悔いられるからだ。**」とあります。つまり、情け深いというのは「恵みに満ちている」と言い換えられるということです。

恵みに満ち、憐れみ深い方です。ですから、主に立ち返るのです。父親であれば、子が非常に事欠いていて、自分のところに助けを求めたら、確かに助けることでしょう。ましてや、天におられる父は、心を痛めてご自分のところに来るものを受け入れないはずがありません。「恵みに満ちている」というのは、自分が受けるに値しないものを、敢えて受けることであります。神がご自分の性質から、好意を寄せておられます。私たちが何かをしたからではなく、ただ神がそうしたいから、渡したちに良くしてくださるのです。そして、神は「憐れみ深い方」です。憐れみとは、受けるに値することを受けなくともよくすることです。本来、怒りの日が近づいていて、滅ぼされてしまうのに、滅ぼされても全く神は正しいとされるのに、それでもそれを控えられるということが、憐れみであります。

2B よく忍耐し、親切な方

そして、「怒るに遅い」ということですが、それは主が忍耐強いということです。モーセが忍耐が切れて、岩を二度打った時に、主は、「あなたは、わたしを聖なるものとしなかった。」と言われまし

た。主は不平を鳴らしていた彼らを、なおのこと憐れみを示して水を飲ませようとされていたのです。そして、新共同訳のほうを見ますが、「慈しみに富」んでいます。神は、主イエスにあって、その慈しみを人々に示しておられました。病の人、悪霊につかれた人、また不道德な人、こうした人々に憐れみを示し、その痛みを取り除いてくださいました。ヨエル書の中に、彼らが苦しみの中でその痛みを取り除かれる姿を見ることができます。

3B 災いを思い直される方

そして、「**わざわいを思い直してください**」のです。ここに、神の心、感情があります。これは、とても大切な神の取り扱いです。神は、ご自分がこのようにすると言われても、それは飽くまでもその聞いている者たちが応答しない場合なのです。もし、心を尽くして悔い改める、主に立ち返るのであれば、主はいつでもその怒りの矛先を降ろします。ヨナ書を、またいつか学びますが、ヨナは「四十日で、ニネベは滅びる。」と叫びました。そこはまさにニネベの王やその住民たちが、悔い改めたら、主は町を滅ぼしませんでした。私たちはとかく、神の言葉を宿命的に読みます。しかし、主は飽くまでも、ご自分の恵みと憐れみに民が立ち戻ってほしいと願っておられるに過ぎないからです。

3A 神の回復 14

そして、主は私たちが失ったものを回復してください。「**主が思い直して、あわれみ、そのあとに祝福を残し、また、あなたがたの神、主への穀物のささげ物と注ぎのぶどう酒とを残してくださいとだれが知ろう。**」と言われていました。主が失ったものを取り戻してください。